

UILI国際技能試験

背景

UILI(国際民間分析試験所連合:Union Internationale des Laboratoires Indépendants)は、日本、アメリカ、カナダ、ヨーロッパ等の26ヵ国の約850の試験所で構成されている組織です。当社が所属している(社)日本環境測定分析協会(日環協)は2001年よりUILIに加盟しており、当社の田畑日出男会長(日環協名誉会長)が日環協の代表として財務を担当しています。UILIでは毎年、総会と役員会を開催しており、今年は4月6～7日にスペインのマドリッドで役員会が開催されました。当社からは、田畑会長、光本育郎(海外事業部)、浦元り(秘書室)、松村徹(環境創造研究所)が参加しましたので、ここで、本会議の中で討議された国際技能試験(International Proficiency Testing)について簡単に紹介します。

現在、さまざまな化学分析のデータに関して、One-Stop-Testingという考え方があります。One-Stop-Testingとは、一般には、「一つの試験所で得られたデータが、世界中で受け入れられるような仕組み」のことを言います。このOne-Stop-Testingが世界的に構築されれば、国際間の取引において、重複して行われていた試験(例えば輸出側と輸入側で実施)をはぶくことが可能となり、「製品のコストを下げ」、「製品が市場に出るまでの時間が短縮される」ことなどのメリットを享受できると考えられています。One-Stop-Testingの実現のためには、世界各国における「規格・分析方法の統一」、「試験所認定等の制度を同じ基準で運用すること」が必要不可欠となります。しかし、現在は、分析方法ひとつをみても、同じ分析対象でも方法が国によって異なっている場合が多く、また、種々の分析方法によって、分析値(結果)にどの程度の差異が出現するのか不明な点も多いのが実情です。

そのため、UILIでは、同一の試験試料を用いて分析結果を相互比較することを目的として、国際技能試験(International Proficiency Testing)を数年前から計画してきました。UILI役員の尽力により、この計画が実現の運びとなって、昨年には試料の配布を行い、このほど参加試験所の分析データの基本的集計が終わったことから、本会議でその結果と今後の方向性についての議論がなされました。

国際技能試験(International Proficiency Testing)

今回の試験では、海底質及び湖底質の2検体を配付試料として、クロム、鉛、ニッケル、亜鉛及び水銀が分析対象とされました。なお、分析対象にはRoHS指令(Restrictions on the use of certain Hazardous Substances:電気・電子機器における特定有害物質使用制限指令)でも対象とされる物質をいくつか含んでいます。

第1回目の技能試験であるにもかかわらず、日本、アメリカ、カナダ、ヨーロッパから200以上の機関の参加がありました。結果のとりまとめと解析は、現在、日環協で行われているところですが、近日中に、ISO等に基づいた手法による基本的な統計解析評価の結果がUILIから公表される予定です。

今回の役員会において、今後さらに詳しい内容、例えば分析方法による結果の違いやその原因等を各国にて解析し、次回の役員会にて討議することが決まりました。また、国際技能試験を継続して行うこと、第2回目の国際技能試験の対象試料と分析項目についても討議することが決まりました。次回役員会は、今年の9月7～8日にカナダのバンクーバーで開催される予定です。



国際技能試験に関する会議



スペイン代表ドロド博士と田畑会長

(環境創造研究所 環境リスクセンター 松村 徹)